



「子ども同士の学び合い」



校長 高柳 政行

新学習指導要領の授業改善のキーワード「主体的・対話的で深い学び」を受け、本校でも小グループでの話し合いや相互発言、学級全体での話し合い活動など、学び合いを取り入れた授業を行っています。しかし、グループ等で学習をすればそれで「主体的・対話的で深い学び」が生み出されるわけではもちろんありません。

ここでは、まず他者と対話することがなぜ思考を深めることにつながるのかを考えてみます。他者の存在によって人は自分の頭の中で考えていたことを言葉にして表現する必要が生じます。この言葉にするという作業により自分の中の曖昧だった思考が形になろうとします。しかし、自分の中にある思考を最初から明確に言語化できるとは限りません。ここで大切な役目を果たすのが他者からの意見や質問などのフィードバックです。これに応えようと対話を繰り返す中で、次第に自分の思考が整理されはっきりしてきます。このように、他者の存在や他者との対話が時に一人では到達できないところまで思考を深めるという役割を果たすと考えます。

思考を深化させるプロセスには様々な種類があります。

例えば、自分の考えと他者の考えとの間で感じる葛藤があった場合、自分の考えを見つめ直したり、新しい考えが導かれたりすることで思考が深まっていくことがあります。

ある教科学習が不得意な児童が、得意な児童の支援によって、一人ではできなかった課題ができるようになることで思考が深まることもあります。また、同時に支援した児童にとっても、分かりやすく説明しようと工夫することで、より理解が深まることもあります。

互いの意見や考えを訂正、追加、明確化するなど関連付けることにより、話し合いの前にはなかった知識や問題解決方略などが共同で構築できるようになることもあります。

このような学び合いによる思考深化のプロセスは、授業の学習課題によって異なります。つまり、教師が課題達成に向けて授業の中でどのように児童の思考を深めていくかといった「授業のねらい」が重要となるのです。児童にとっては、どのように自ら思考深化のプロセスをたどっていくかという「授業のめあて」が重要となります。

保護者の皆様には、すでにこういった授業を本校の学校公開や授業参観でご覧になった方もおられるはずですが、

これからの子ども達に、必要な資質・能力を育成していくために欠かせないのが「子ども同士の学び合い」、すなわち「主体的・対話的で深い学び」のある授業です。本校では、引き続き、教職員が力を合わせ、このような「子どもの同士の学び合い」のある授業を創造していきます。

学校公開のご感想の中にも、「グループワークやディスカッションなど対話を通じた主体的な深い学びの授業を見させてもらいました」「学級会の話し合い活動では、子どもたちの個性やクラスの雰囲気を見ることができました。」など、「子ども同士の学び合い」の様子について評価していただいたものもありました。今後とも、保護者の皆様からの忌憚のないご意見・ご感想をお寄せいただきますようお願いいたします。

<学び合いの様子>

